心洗われる兄弟愛の話二つ

[盲目のジェロニモとその兄]（ シュニッツラー作）イタリア人の兄カルロと盲目の弟ジェロニモは、フランスとスペインの国境を越える峠のホテルの前で、行き交う馬車の旅人を相手にジェロニモがギターを弾き、歌を歌い、カルロが投げ銭を受け取っている。

二人が子供の頃、不幸な事件が起きた。兄が遊びで放った吹き矢が、弟の目に当たり、失明したのだ。兄は鍛冶屋の徒弟を止め，弟ジェロニモのために自分の人生を犠牲にする決心を固めた。以来、二人はホテルの人たちの好意で、まずまずの生活をしていた。

だが世の中には悪い人がいるものだ。ある若い客が歌を聞いて1 フランを兄の盆に入れたが、兄が席をはずした機会に、ジェロニモに向かい「だまされちゃいけないよ。わたしはあんたの相棒に20フランの金貨をやったよ」。これは悪魔の囁きだった。

「兄貴、おれに触らしてくれ。長いこと金貨に触ったことがないんだ」「何だって。おまえ、何を言っているんだ」「20フランあるだろう。おれはちゃんと知っているんだ」「どこから20フランなんてもってこられるんだ」。こうして兄に対する弟の不信感は高まってゆく。ジェロニモは「これまでもずっとおれを騙していたんだろう」とまで言いだすに及んで、二人の仲はどうにもならなくなった。

結論を急ぐ。兄は同宿のフランス人の財布から20フランの金貨1 枚を盗む。そして夜明けと共に早々と宿を離れた。十分離れた所で兄は弟に20フランの金貨を触らせた。だが、弟は喜ばなかった。却って兄に対する不信感を口にした。二人は途中で憲兵に出会った。「あんた方を駐在所に連れてこい、と頼まれたんだが。峠のホテルで金貨が盗まれたらしいんだ」。「カルロ、お前はなぜ黙っているんだ」「だってどうしろと言うんだ。今に何もかもわかるだろう」。

その時、盲人はギターを落として兄の顔を両手でさぐり、口の辺にキスをした。兄は弟の顔にかつて見たことのない幸福そうな表情を見た。弟の微笑みはカルロの心を明るくした。これから牢獄での禁固が待っていようと、それが何だろう。彼は再び、或いは初めて弟を持ったのだから。

[雨の山吹]（ 山本周五郎作）江戸時代の石川県小松。勉強塾の小旅行に参加した妹の汝生（ なお）が、帰る友人に手紙を託し行方不明となった。手紙は「自殺する」との内容。弟又三郎は兄兵庫の命を受け、小松の海岸を探し歩いた。海岸に揃えた草履、櫛。汝生のものだった。遺体は揚がらなかったが、又三郎は草履を焼いた灰と櫛を骨箱に入れた。

これより先、汝生が慕っていた家士の喜兵衛が公金を使い込んで逃亡した。喜兵衛は結婚し、一児をもうけたものの妻が病死した。その治療のため公金を使い込み、どうにも返せなくなっての行動だった。

以来4 年の歳月が過ぎた。汝生の塾の先生が、遠く静岡の駿河で汝生の姿を見かけた、顔のほくろからして間違いがない、という。兄兵庫は弟又三郎に「汝生は喜兵衛と一緒にいるはず。二人を自決させよ。あるいは斬れ」と命じた。

駿河の旅館で、又三郎は客室に花を生けにきた汝生と会った。「おその」と名を変えていて、顔も着ているものも貧にやつれていた。「生きていたんだな、汝生、喜兵衛と一緒なのか」。汝生は黙って頷く。汝生は塾にいるときから早引けして喜兵衛の家に行き、赤ん坊や家事の面倒を見ていた、という。さらに喜兵衛が切腹しよう、という場に行き合わせ「私たち3 人で新しい生活を始めましょう、と私が泣いて頼んだのです」。

汝生は小遣いや物を売り、小金を持たせ、喜兵衛を石川から福井へ逃がした。そして自分も跡を追いかけた。「次弟も生まれました。今は貧しいながら親子4 人楽しく生活しております。兄さん、どうか見逃して下さい」。激しく泣く汝生。「あす返事をする」又三郎は席を立ったものの、汝生の幸せを思うと許す気になっていた。翌朝、汝生の家に行く途中雨に濡れた山吹の花を見た。二つの枝が絡みあって重い花を支えていた。汝生と喜兵衛に見えた。「兄へは何と返事をしよう」とつぶやく又三郎の顔は晴れやかだった。

小説はここで終わる。「兄さん、人違いでした。汝生ではありませんでした」と嘘をつく。真実を告げ「私には斬れません」というか。読者の想像に任せている。（ 小林）